

## 2000年代以後の障害学における理論的展開／転回

— 「言葉」と「物」、あるいは「理論」と「実践」の狭間で—

辰己 一輝\*

### Theoretical Development/Turn in Disability Studies since the 2000s Between Words and Things, or Theory and Practice

TATSUMI Ikki

#### 論文要旨

本論文は、今まで国内で周知されてこなかった2000年代以降の障害学の理論的動向の紹介を試みた。そのために本論文は、第二節で「批判的障害学(CDS)」と呼ばれる、障害学内で新たに生じた学際的研究の諸特徴を整理することから出発した。続く二つの節で、本論文はCDS以後の障害学の展開の一端を跡付けた。第三節では、クィア理論と障害学とが交差することで生じた「クリップ・セオリー」と呼ばれる一連の研究について概説した。第四節では、社会だけではなく身体の変化可能性を直接記述しようと試みる、障害に対する唯物論的アプローチについて概説した。最後に、現代の障害学が取り組み続けてきた問題を「言説と身体」・「理論と実践」という二分法をいかに乗り越えるか、という観点から総括した。

キーワード 批判的障害学、クリップ・セオリー

#### Abstract

In this paper, we attempt to introduce the theoretical trend of disability studies since the 2000s, which have been widely unknown in Japan until now. Therefore, in section 2 of this paper, we review some characteristics of the new interdisciplinary approaches, called *critical disability studies* (CDS). Consequently, we traced part of the development of disability studies after CDS in the following two sections. In section 3, we present an overview of the series of studies on the *crip theory* that has emerged as a result of the intersection of the queer theory and disability studies. In section 4, we discuss the materialistic approach to disability (impairment) that attempts to directly describe not only the potential for social change but also for physical change. In conclusion, we summarize the problems that contemporary disability studies have been tackling from the perspective of how to overcome the dichotomy of *discourse and body* or *theory and practice*.

Keywords: Critical Disability Studies, Crip Theory

---

\* 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 ; u317483b@ecs.osaka-u.ac.jp

## 1. はじめに：国内における障害学受容の現在

昨今、海外の「障害学 Disability Studies」と呼ばれる研究領域において、一般に「ポスト構造主義」や「ポストモダン」と大まかに名指される思想を積極的に取り入れながら、従来の障害学を批判的に刷新することを試みる一連の動きが、英米圏を中心に現れてきている。その問題意識を一言で表すならば、いわゆる「近代」を支える諸前提（「人権」概念、諸個人の自律性 *autonomy*、資本主義的「労働」を至上とした価値基準）に則った仕方で障害者の権利を要求するのに留まらず、その際に立脚されている諸前提そのものに疑いをかけ、「近代」的ではない別の政治の可能性を探究すること、とひとまずはまとめることができる。その潮流は、未だ日本国内においてほとんど紹介がなされていない。本稿では、その潮流の内実をできる限り克明に描き出すことを目指す。しかし、本論に入る前に、そもそもなぜ国内において今まで紹介がなされてこなかったのか、そして、それをここで紹介することの意義について、説明しておきたい。

その理由について筆者の見解を述べるならば、そもそも障害学の「古典」とされている海外の基本文献の翻訳さえ国内で十分に進んでいないことなど<sup>(1)</sup>、複数の要因が考えられるが、一つ根本的な要因を挙げるとすると、障害研究を発展させていくためには古典的な障害学における道具立てで十分事足りており、（少なくとも現状は）それ以上「理論」から何かを得る必要はない、むしろ現場における「実践」の方を重視すべきである、という認識があると思われる。ここで言われている「古典的な障害学」とは、いわゆる障害の「社会モデル」という発想をはじめとする、1970年代頃に端を発する伝統的なイギリス・アメリカ障害学の諸言説を指している。古典的な障害学は、身体の物理的損傷・機能的障害としてのインペアメント *impairment* と、社会が障害者に対して強いている不利益・障壁としてのディスアビリティ *disability* とを概念上区別することから出発した。従来の価値観においては、障害（インペアメント）はそれを抱える個人の問題であり、それを解決するためにはその個人に対する医学的処置や福祉的援助によるアプローチしかありえないとされてきた。このような価値観は障害の「個人モデル」ないし「医学モデル」と呼ばれる。対して、古典的な障害学は、障害の社会構築主

義的な側面、すなわちディスアビリティとしての側面に焦点を当てることで、「障害を産み出しているのは個人ではなく社会である」と、視点を個人から社会へと転換させる「社会モデル」を提起したことで知られている。日本の障害学も、おおよそこの「社会モデル」を中心として展開されてきたと言って差し支えない<sup>(2)</sup>。言い換えるならば、障害学の思考は「社会モデル」という古典的枠組みをいかに洗練させていくのかに注力されており、それ以後に海外で登場した諸理論を輸入しなくとも、国内の障害研究としては独自の発展を続けてきたといえる。

とはいえ、国内の障害学者たちがポスト構造主義やポストモダンの思想を単純に無視しているわけではないことも付言しておきたい<sup>(3)</sup>。国内における障害研究の中心を担う組織である立命館大学の「生存学研究所」が、韓国・中国の障害研究者・当事者と共同して毎年開催している「障害学国際セミナー」の2017年度のセミナーの主題は「ポストモダンと障害」であった。そして、本研究所の中心人物であり国内を代表する障害学者の一人である立岩真也は、本セミナーにおける発表原稿を加筆・再構成した『不如意の身体』（2018）第四章の一部で、近代とポストモダンとの関係について以下のような整理を行っている。

第一に、ポストモダンが語られた前世紀から今の世紀にかけて基本的な変化は起こっていないと私は考えている。つまり、近代を自己所有権 (self-ownership) の時代・能力主義の時代 (the age of “ableism”=A) とするならば、その時代は続いている。だが、同時に、常に、別の原理・現実 B は併存している。A の時代の後に B が来る、来てほしい、来るかもしれない、と考える必要はない。常に二つ (以上) の間の抗争がある、それに社会運動も、またときに学問も関わっているのだと考えることである。B は社会に現に存在する契機むしろ社会の基底であり、また A を批判し続ける位置でもある。それをポストモダンと呼びたいければ、そう呼んでもかまわない。そして B は、ポストモダンの思想と一定の親和性を有するものではある。私も以前いくらかは読んだ。ただ、その思想・言説がなければ成立しないものでもなかったとも言えると思う。私はむしろ障害を巡る社会運動とその言葉から、B を受け取ったと思う。(そして「post」と呼ぶ必要もないだろうから、私はその言葉を使ってこなかった。)(立岩

2018:100)

立岩の見立てでは、ポストモダンが対象とする何らかの現実には確かに今日の社会に伏在しているかもしれないが、あくまで私たちが生きているこの現実を支配しているのは、依然として「近代」を支えている諸前提（自己所有権や能力主義）であり、ポストモダンが提唱されるようになった20世紀後半以降も、その状況に大きな変化や断絶はみられない。ただし、だからといってポストモダンの諸言説が全くのナンセンスだと断じられているわけでもない。「近代」的な現実 A を批判し続ける別の現実 B が存在しており、私たちはそれを、ポストモダンの思想・言説と現代の社会運動という二つの経路を通じて把握することができる。そして立岩は、あくまで「言説」よりも「運動」の側から現実 B を語るための言葉を練り上げようとする。

本稿では、立岩のこのような整理を踏まえて、障害学の展開を考えるための一つの対立項を仮説として提示してみたいと思う。それは、様々なテキストや言説の吟味に基づく普遍的な「理論」を志向するのか、当事者たちが生きる「現場」に根差す仕方言葉で言葉を紡ぎだす「実践」を志向するのか、という、理論／実践の二項対立である。この対立は、障害というテーマに限らず何事かを研究する上ですべての人が直面しうる学問研究上のジレンマであると思われるが、このような対立図式を念頭に置くことで、障害学の展開をある程度一貫した仕方描くことが可能になるのではないかと筆者は考えている。この二項対立を起点に本稿の立場を述べるならば、本稿はまさしく、ポストモダンの思想・言説、すなわち「理論」の側から立岩の言う「現実 B」を思考することを目指す論者たちが海外に多数存在することを示そうとしている。そもそも「運動」や「実践」から言葉を抽出することと「理論」の側からそうすることとは、必ずしも排他的な関係に存するわけではないはずである。本稿の目的は、上述した理論／実践という対立項を手掛かりとしながら、そのような思想の潮流が確かに存在する点を明らかにすることである。そのために本論では、まず2000年代以降の障害学における思想的特徴を整理し、そこから今日に至るまでの障害学の理論的展開／転回的一端を順にみていく。そして最後に、改めてそれらの潮流に通底する問題意識が何であったのかを、理論／実践の二項対立という筆者自身の観点に再帰

する仕方で総括し、本稿を閉じる。

## 2. 批判的障害学（CDS）の登場

本節では、2000年代以降の障害学において出現した批判的障害学 *Critical Disability Studies*（以下 CDS と表記）あるいは批判的な障害理論 *Critical Disability Theory* と呼ばれる新たな潮流について概説する<sup>(4)</sup>。この潮流に属するとされる研究は多岐にわたっており、それらに対して一元的な説明を与えることは困難だが、ここではその大まかな傾向性と言えるものを、以下の六つの論点に要約して説明する。

1) CDS は、その「批判的 *Critical*」という形容詞が示しているように、既存の障害学が立脚してきた諸前提や枠組みに対する批判的再考を促すことを主眼とする<sup>(5)</sup>。その最たる例が、前述した古典的な障害学におけるインペアメント／ディスアビリティや個人モデル／社会モデルといった二分法そのものに対する疑義である。CDS は、私たちが（社会的に構築されたディスアビリティとは区別して）「自然 *natural*」で不変の事実とみなしてきたインペアメントさえもが、実は社会的・文化的な背景から構成されたものであり、歴史的にみれば「近代」以降の産物に過ぎないことを明らかにしている。それは、私たちが自明であるがゆえに「非政治的なもの」とみなしてきた身体的（インペアメントの）経験をも政治的論議の対象になりうること、そして、その経験が歴史的に不変ではないがゆえに、社会的実践を通じて変革可能であることを意味している。このような前提から出発して、CDS は現在の体制や価値観の内側に留まるのみならず、それらがどのような歴史的経緯から生み出されてきたのかという「過去」に注視した批判的分析と、それらをいかにして変革していくのかという「未来」に注視した政治的構想とを並行して繰り広げていこうとする。

2) 以上のような批判を可能にする道具立てとして、CDS は、現象学からポスト構造主義に至るまでの20世紀以後の（主に大陸の）哲学の知見を障害研究へと積極的に導入することに努めている<sup>(6)</sup>。CDS は、とりわけミシェル・フーコーが『監視と処罰』（1975）や『性の歴史 I 知への意志』（1976）などで展開してきた「生権力 *bio-pouvoir*」や「生政治 *biopolitique*」といった

概念を取り入れることで、「社会モデル」以来の社会構築主義的アプローチをより洗練させることを目指した<sup>(7)</sup>。障害学におけるフーコー受容を決定づけた Shelley Tremain 編集の論集 *Foucault And the Government of Disability* (2005) では、正常 normal／異常 abnormal、健康／病・障害のような二分法によって人間の身体を類型化し支配する権力の様態が、臨床医学や生物学などの諸科学の出現と結びつきながら歴史的・社会的に発生してきたメカニズムを解明することが試みられている。また、フーコー同様に CDS に多大な影響を与えた思想家として、クィア理論家のジュディス・バトラーがいる。バトラーは著書『ジェンダー・トラブル』(1990) で、生物学的な性としての「セックス」と、社会的な性としての「ジェンダー」とを区別する従来の思考に疑問を呈し、セックスそれ自体もまた社会的に構築されたものに過ぎない点を暴き出したことで知られる。CDS は、まさしくこのバトラーの立論がインペアメント／ディスアビリティという区別にも当てはまるものであると捉えることで、両者の区別それ自体を曖昧化し、上述したインペアメントそのものの構築的性格や政治性についての考察を深めている<sup>(8)</sup>。その他にも、医学的説明のみでは汲みつくしえない障害者の生を記述する際の有効なモデルとして現象学を応用する研究 (Titchkosky 2012) や<sup>(9)</sup>、ジークムント・フロイトやジャック・ラカンの精神分析理論を身体障害の問題系へと接続する研究 (Wilton 2003) ; (Goodley 2012) など、論者によって様々な形で大陸哲学・思想が取り入れられている。

ポスト構造主義を摂取することで、3) CDS は、障害とそれを取り巻く問題状況を「テキスト」や「言説 discourse」、あるいは「表象 representation」の水準で取り扱う視点を切り開いている。フーコーらの議論を経由することは、障害研究の分析対象を、現実の政治運動や医療の場面のみならず、小説や映画などといったフィクションにまで拡張することにつながっている。そのような障害学における「テキスト」や「表象」への着目を準備した重大な先駆的研究として、David T. Mitchell と Sharon L. Snyder の仕事に触れないわけにはいかない。二人は共著 *Narrative Prosthesis: Disability and the Dependencies of Discourse* (2000) において、英米文学を中心として、フィクションの中で障害がどのような仕方で表象され、利用されてきたのかについて考察している。既存の文学作品において障害(あるいは障害的な表象)は至るところに散見されるが、そのことは、必ずしも障害をめぐる政治的問

題が明るみに出され、障害者にとってよりよい社会を実現するためのきっかけになることを意味しない。むしろ二人の分析によれば、作品内で障害は、しばしば物語が解決すべき困難を提供したり、特定の登場人物の「個性」を説明する際の隠喩として用いられたりすることで、物語を駆動させるための「補綴 *prosthesis*」として従属的に機能させられているという。しかも、そこで表象される障害は、最終的に乗り越えられ解消されるべきものとしてしか描かれないことによって、障害者に対する差別的態度を助長し、人間の身体の高多様性に対する想像力を奪ってしまう。既存の文学作品は、障害について書くことによって逆説的に障害をテキストから消去してきたのである。このように、一見して非政治的にみえる物語の内に障害者差別的な価値観の再生産という政治的なメッセージを看取する二人の読解は、日常会話や芸術作品の創作において、健常者の側が、障害者たちによって文化的に蓄積されてきた障害に関する語彙を自分の表現の都合のために——しばしば欠如や機能不全のメタファーとして、その語彙の意味を捻じ曲げる仕方でも——無批判に転用するという、ある種の「文化盗用 *cultural appropriation*」の構造とも関わるものであり、今日の文化状況を批判的に考える上でも重要な示唆を有した著作であるといえる。

また、哲学との理論的協同に限らず、4) CDS は、障害学を他分野の知へと積極的に開いていき、フェミニズムやクィア理論、ポストコロニアリズムなどといった他の潮流との政治的合流・連帯を図るという「領域横断性＝学際性 *interdisciplinary*」の称揚を特徴とする<sup>(10)</sup>。CDS の論者たちは、障害学が他分野との交流を経験することによって、障害(者)を理解する上でそれまでには考えられてこなかった新たな観点を獲得することができる点を強調する。そもそも、障害者に対する抑圧や差別は、女性差別やトランス差別、非白人差別などといった他の差別構造との複雑な絡まり合いの内に存在しており、もはや障害に直接関連する事態のみを対象としていては、それを取り巻く権力関係の根深さを見逃してしまうと、CDS の論者たちは考えている。

さらに見逃せない点として、5) CDS は、今日の資本主義社会でますます進行する「新自由主義 *Neoliberalism*」化の流れに対する抵抗を強く意識している。近代以後の資本主義社会(あるいはその根本原理とされる「能力主義」)に対する批判意識自体は古典的障害学にも存在していたが、CDS はそれをさらに徹底化し、「多様性 *diversity*」を謳う今日の社会が障害者を市場へと

包摂し、経済を駆動するのに都合のよい存在として「商品化 *commodification*」してきた事実を鋭く指摘する（次節でみる *McRuer* の議論がその一例である）。また、新自由主義体制を問題化することは同時に、グローバリゼーションの名の下に進展する帝国主義的な支配に対する抵抗も問題化する。2000年代頃から、「障害学」というディシプリンそのものに伏在する白人中心主義的・帝国主義的傾向性が盛んに議論されるようになったことは、その一つの現れといえる。例えば、*Christopher Bell* は *Lennard J. Davis* 編集の *The Disability Studies Reader. 2nd ed.*（2006）所収の論考 *Introducing White Disability Studies: A Modest Proposal* において、障害学に「白人の *White*」という形容詞を意図的に付け加えることで、これまでの障害学が白人中心に形成されてきた事実を告発し、多くの議論を呼んだ。このような、人種や民族という視点からの障害学の白人性の相対化は同時に、障害研究に新たな形容詞が付く可能性、例えば「黒人の障害学 *Black Disability Studies*」などの系譜が新たに形成されうる展望を切り開いている（これも前述した「領域横断性」の一例としてみることができるだろう）。このように、CDS は帝国主義的グローバリゼーションのさなかで障害学自体が甘受してきた歴史的・地政学的前提を自己批判するとともに、障害研究そのものが西洋近代の枠組みにはとらわれない仕方（それぞれの地域に根差した方法論で）複数化されうる点を強く主張している。

最後に、とりわけ 2010 年頃から顕著な傾向として、6) CDS は、私たちが生きる「身体」に対する唯物論的な着目を通じて、障害者の経験の精緻な記述や政治的変革の可能性を模索している。上述の 2) で書いたように、CDS はポスト構造主義的な分析手法を得たことで、障害を「言説」や「テキスト」として扱う視点を獲得した一方で、そのテキスト中心主義的な傾向性ゆえに障害者が生きる身体の経験を取り逃してしまうのではないかという批判が障害学内部から現れることになる。そのような批判への応答として、本稿の第 4 節で詳しく見るように、CDS の一部の論者はとりわけフランスの哲学者 *ジル・ドゥルーズ* と *フェリックス・ガタリ* の思想に依拠しながら、障害者の身体や生命をポジティブに捉え直す唯物論的なアプローチの創建を試みている。

これらの特徴を有しながら、CDS の系譜は今日に至るまで理論的發展を続けている。次節からは、その系譜の一端を辿ってみることによって、今日



の CDS がどのような地点にまで到達し、今後取り組まれるべきどのような課題に直面しているのかについてみていく。

### 3. クリップ・セオリー：障害学とクィア理論の領域横断的遭遇

本節では、2000 年代の障害学の歩みにおいて決定的な影響をもたらしたといえる、「クリップ・セオリー-Crip Theory」と呼ばれる立場について概観する<sup>(11)</sup>。CDS を構成する立場はこの理論一枚岩では決してないし、紙幅の都合上、CDS から派生したすべての分野に触れることは叶わないが、この理論には、前節で提示した 6 つの特徴のいずれもが顕著に現れていることから、本理論を紹介することは、CDS の動向を跡付ける上での一つの足掛かりになると思われる。

クリップ・セオリーについて説明するためには、言うまでもなくその「クリップ Crip」という語の意味について説明しておく必要がある。Crip とは、元来身体障害者に対する蔑称として用いられてきた語であるが、2000 年代初頭、その Crip という語を、障害者ないし障害研究者の側がある種の政治的抵抗のスローガンとして批判的に引き受け直そうとする動きが出現する。その発端は、クィア研究を扱う学術誌『GLQ』で組まれた特集号 *Desiring Disability: Queer Theory Meets Disability Studies* (2003) 所収の論考にて、Carrie Sandahl が「クィアとパラレルな関係にあるものとしてクリップという用語を使用する」(Sandahl 2003:52) と宣言したことにあるとされる。「クィア Queer」の思想の実践者たちは、旧来同性愛者に対する侮蔑語として用いられてきた「クィア」という語を、むしろセクシャルマイノリティの側が批判的に転用し、自らの政治的プライドや異性愛中心主義的社会に対する抵抗の印として行使可能な語として「再 - 意味づけ resignification」してきた。Sandahl は、そのようなクィアの実践と並行するように、障害者も「クリップ」という語をあえて用いることで、健常者中心主義的な社会を批判し、自らを政治的にアイデンティファイすることを可能にすると主張している。ただし、「私はクィア/クリップである」と表明することによるアイデンティフィケーションが、固定化されたアイデンティティに安らうことなく、むしろそれを絶えず不安定化させることが重要である。バトラーがクィ

アという語を用いるというパフォーマンス的な実践を、異性愛規範を攪乱する契機とみなしたように、クリップという語を用いることは、私は健常者である／障害者でないという線引きそのものを攪乱する契機となりうるのである。このアイデンティティの攪乱という発想は、近代的権力によって生み出される健常者／障害者というアイデンティティ・カテゴリーを受け入れた上で様々な法的・社会的権利を体制側（健常者側）に要求する従来の政治戦略とは異なって、体制側からの「障害者」という一方的なラベリング自体を拒否することで、法律や社会制度よりも根本にある健常者中心主義的な価値基準を暴露し動揺させるという、新たな戦略を障害運動にもたらしめている。

このような「クリップ」という語の戦略的再 - 意味付けの実践を一つの理論として結実させたのが、Robert McRuer の *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability* (2006) である。彼は、まさしく Sandahl による宣言を明示的に引き受けながら、クリップという語を用いることに伴う境界攪乱的な性格と、その政治的変革としてのポテンシャルを主張している。しかしながら、McRuer のポジティブな政治的主張は、決してある種の楽観主義に基づいたものではなく、現実に対する確かな批判的洞察を経由したうえでなされている点に注意を払っておきたい。McRuer は、1990年代以降のアメリカ社会における新自由主義的な趨勢が、一見して障害者に対して「寛容」な態度を見せているその背後で、逆説的にも健常者中心主義的な価値観を再生産している事態を「強制的な健常性 compulsory able-bodiedness」という概念によって説明しようとする<sup>(12)</sup>。McRuer 曰く、現代において「健常性」という規範と、それを体現する（健常者を中心に組織化された）体制側は、単純に病や障害を排除する方向へと向かっているわけではない。むしろ現行の社会が求めているのは、病気や事故、災害といった様々な破局的経験に襲われながらも、最終的にそれらを乗り越え、より強くなることのできる「柔軟な身体 flexible bodies」(McRuer 2006b:16) であり、そのような身体の要請は、グローバル化の進展やテクノロジーの飛躍的進歩などによって流動化する社会的・経済的現実に対してフレキシブルに即応できるマルチタスクな労働者像を理想とする現代資本主義（新自由主義）の欲望と合致し、

それを再生産するように機能する。このように、現代の「強制的な健全性」規範は、障害者を排除するのではなくむしろ包摂することを通じて強化されていくと同時に、その見かけ上の「寛容さ」ゆえに、障害者に対する抑圧的状况を隠蔽してしまうのである。

McRuer による問題提起は、後続の様々な障害学者たちへと受け継がれているが、中でもとりわけ Alison Kafer による研究は、McRuer の議論をさらに拡張・洗練させたものとして広く参照されている。Kafer は著書 *Feminist, Queer, Crip* (2013) において、(インペアメントもディスアビリティも両方含めて)「障害」というカテゴリーが「脱政治化 *depoliticization*」されてきた歴史を批判しつつ、クリップという語を用いることが、その語の境界攪乱的な性格ゆえに、政治的に開かれた論争の場を提供し、女性やクィアといった他のアイデンティティ・カテゴリーをもその論争へと巻き込んでいく連帯のヴィジョンを提起している<sup>(13)</sup>。本書にも様々な論点を見出すことができるが、(クィア理論との交差という意味でも)特に興味深い論点として、ここでは彼女が定式化する「クリップな未来性 *crip futurity*」という概念についてみていきたい。

Kafer は、クィア理論の中でも「アンチソーシャル・セオリー」と呼ばれる流派に位置づけられるリー・エーデルマンや、独自の「クィアな未来性 *queer futurity*」論を提起するホセ・エステバン＝ムニョスといった論者たちによる「時間性 *temporality*」への着目から影響を受けつつ、新たな時間論を打ち出している。エーデルマンは、主著 *No Future: Queer Theory And The Death Drive* (2004) の中で、社会を暗黙裡に支配する「生殖＝再生産的未来主義 *Reproductive Futurism*」という規範について苛烈な批判を行っている。本書の第一章として後に改編されることになる論文「未来は子ども騙し クィア理論、非同一化、そして死の欲動」(1998)の段階で、すでにエーデルマンは、左右を問わずありとあらゆる政治的立場が自らの主張の根拠として、望まれるべき未来の形象としての「子ども」を持ち出す点を論難している。曰く、「子ども」という象徴に訴えて未来への希望や責任を謳う社会は、そのことによって、子どもを産むことを目的化する異性愛主義的な規範を絶えず再生産している。さらにいえば、「子ども」という形象に委託する仕方未来を志向する人たちは、結局のところ既存の社会秩序が生殖＝再生産されることに信を置いている。この意味で、既存の政治は、その内容がどれほ

ど急進的にみえたとしても、彼に言わせれば「保守的」であるに過ぎない。エーデルマンは、このような政治のあり方に対して徹底して「否」を突き付ける力能、すなわち「未来」という信仰そのものに抵抗する「死の欲動 death drive」に「クィア」のポテンシャルを見出している。

以上の議論などを着想源としながらも、Kafer は障害という観点から時間（性）をさらに別の仕方でも問題化する<sup>(14)</sup>。Kafer は、社会が近代的「進歩」の観念や優生学的な発想を下地として、障害者を常に「未来」から排除している点を批判する。障害は生殖＝再生産が紡ぐ絶えざる進歩の時間を途絶させてしまう「未来なき未来 the future of no future」あるいは「自らの未来を終わらせるもの what ends one's future」（Kafer 2013:33）として理解され、障害者の取りうる選択肢が、医学的治療などを経て健常者のグループに包摂されることに狭められてしまう。このような価値規範の下では「障害のない未来」しか想像することができず、障害者が障害者のままに未来を生きる可能性が最初から閉ざされてしまっているのである。このような現状に対抗するために Kafer は、障害者にとって「アクセス可能な未来 accessible futures」を積極的に想像することを提案する。ここで、前述した障害の（脱）政治化をめぐる議論が改めて重要となってくる。というのも、彼女にとって「障害」という概念を絶えず政治的論争へと開くことは、現在の社会とは別の仕方でも障害者の「未来」を想像することと不可分に結びついているからである。

以上のように、障害者／非障害者（健常者）という二分法を絶えず攪乱する標語として、加えて、政治的連帯や社会変革のスローガンとしても用いられてきた「クリップ」という用語は、McRuer や Kafer だけでなく、他の様々な論者たちによっても変奏され、今日まで継承され続けている。例えば、Donna Reeve は上述の論点を踏まえつつ「アイ・クリップ iCrip」という独自の造語を産み出している。この i という接頭語は「iPhone」のようにテクノロジー全般を簡易的に表現したものである。Reeve は、ダナ・ハラウェイが論文「サイボーグ宣言」（1985）で提起した、科学技術がもたらしうる男性／女性・人間／動物・生命／機械などの二分法の解体というテーマを「i」という文字に仮託し「Crip」という語に接合することで、テクノロジーの利用が「強制的な健常性」の規範から逸脱した新たな身体を創造しうることを示している。また、昨今の McRuer や Kafer も含めた障害学者たちによる環

境問題への関心は、「エコ・クリップ・セオリーEco-Crip Theory」という新たな標語を生み出してもいる。この標語を掲げた Sarah Jaquette Ray らの編集による論集 *Disability Studies and the Environmental Humanities: Toward an Eco-Crip Theory* (2018) では、昨今注目を集めている「環境人文学 Environmental Humanities」の知見を障害学(クリップ・セオリー)に持ち込むことで、「社会」という語では捉えきれない非人間的「自然」や「環境」と障害(者)との共生を理論化することを試みている。これらの議論は、障害を単に社会的に構築されたものとして取り扱うだけでなく、その「物質」や「生命」としての側面をも考慮に入れたものとなっている点で、後述する障害への唯物論的なアプローチとも呼応する論点を含んでいる。また、近年 McRuer 自身も *Crip Times: Disability, Globalization, and Resistance* (2018) という大著を出版しており、本潮流はこれからも来るべきアクセス可能な「未来」へと受け継がれていくことだろう。

#### 4. 障害学における「存在論的転回」：ポスト構造主義からポストヒューマンへ

本節では、CDS の流れを汲みつつとりわけ 2010 年代以後に台頭してきた、障害学の新たな展開／転回について概観する。ここでは、その「転回」についてまとまった記述を行っている Michael Feely の研究を導きの糸としながら論を進めていく。Feely は論文 *Disability studies after the ontological turn: a return to the material world and material bodies without a return to essentialism* (2016) において、ポスト構造主義が導入された 1990～2000 年代までの障害学と、それ以後に登場した障害学の唯物論的な方向性との間に、彼が「存在論的転回」と呼ぶパラダイムシフトを見て取っている。以下、Feely による説明にしたがって、その「転回」の軌跡を辿り直してみよう。CDS は、フーコーの生権力論やバトラーのクィア理論などを障害学に導入したことによって、健常者／障害者という二分法そのものを問いただし、そのような二分法がいかなる社会的・歴史的構造によって生み出されてきたのかを批判的に分析する視座を獲得した。前節でみた McRuer をはじめとするクリップ・セオリーの論者たちも、おおむねそのような流れの延長線上に位置づけることができる。しかし、ポスト構造主義的アプローチに対しては、当の障害学内部から多くの批判が寄せられた。Feely によれば、その批判の中身は

以下の三点に要約できる。①ポスト構造主義的アプローチは、その「言語」や「言説」、「テキスト」の分析に偏った傾向性ゆえに、実際に障害当事者が生きている物理的な生活世界を見落としている。②科学ないし科学技術に対して批判的な形でしか言及できず、それらと障害者とがポジティブに関与し合う展望を提示できない。③障害当事者が抱える身体的苦痛の経験の重要性を無視・軽視してしまっている。それぞれ具体的にみていこう。まず①に関しては、筆者の見立てでは、さらに二つの含意をそこにみることができる。1) 障害を分析対象とする研究者が、テキストや言説ばかりをみており、現実生きる障害者たちをみていない。2) 障害を分析対象とする際に用いられている理論それ自体が、障害者の生きる現実を論じる際の原理的困難を抱えてしまっている。前者も深刻な問題だが、ここではとりわけ後者に注目してみたい。CDS が基礎に据えるポスト構造主義的アプローチは、障害者の生きる物理的・身体的現実（インペアメント）をも含めたあらゆる事象を「言説の産物」へと還元することで、自然科学が対象とするような物理的・身体的現実を（社会的に構築された虚構的な対象として）なかったことにするか、少なくとも直接的にはアクセス不可能な彼岸へと追いやってしまう。つまり、ポスト構造主義的アプローチは、障害者たちが生きる現場の実践へとリーチすることができないという理論上の困難を抱えていることになる。また、②の批判が示すように、ポスト構造主義的アプローチは、（とりわけフーコーを論じる CDS の学説がそうであったように）健常者／障害者という区別の言説が構築された要因を近代科学の成立に求めることで、科学をあまりにも敵視するきらいがあり、極端には科学の研究蓄積それ自体を「言説の産物」に過ぎないナンセンスとして排斥してしまう傾向があるとされる。そうすると、障害の治療やテクノロジーによる補助といった当事者にとって肯定的な事態さえも、健常者中心主義的な既成の権力を再生産してしまうものとして、ただ拒絶することしかできなくなってしまう。そして、どれだけ社会モデル・社会構築主義の立場を推し進めていったとしても、障害者たちが病み、痛み苦しんでいるという事実は確かに存在している。この点が上記③の批判に関わってくる。科学技術に訴えた治療に代わって、CDS の論者たちは「言説」や「言語」の水準での変革を通じた障害者の状況改善を主張するが、その変革によって障害者の身体が直接変化したり、まし

てや苦痛が「治癒」したりするわけでは決してない。実際に病や障害に苦しむ当事者に向かって「障害は存在（実在）しない、言説の産物に過ぎない」と言うことが果たして何になるのだろうか。

以上の批判を受けて、障害学は次のように問わざるをえなくなる。すなわち「個人モデル・医学モデル的な本質主義を批判しながらも、言説・テキスト偏重の極端な社会構築主義にも陥ることなく、障害者たちが生きる物質的現実を記述し、政治的实践へと接続可能な理論的アプローチとはどのようなものでありうるか」と。そして、この問いに触発されるように障害学（CDS）内部で出現したのが、「存在論的転回」を担う諸理論であると、Feely は考察している。大ざっぱに言えば、その「転回」の内実は、社会構築主義から唯物論へ、「言説」としての身体から「物質 material」としての身体へ、と粗描することができる。その具体的なプログラムは論者によって様々だが、その論者たちが軒並み依拠している、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ（以下ドゥルーズ＝ガタリと表記）の哲学の内容をみれば、「転回」以後の思想の核となっている諸要素を掴むことができる（Feely 自身もその主張の多くをドゥルーズ＝ガタリの哲学に負っている）。そこで以下、ドゥルーズ＝ガタリと障害学との関係性について概略的にみていこう。

そもそも、なぜドゥルーズ＝ガタリの哲学がそれほどまで参照されるのか。通俗的には、ドゥルーズ＝ガタリはフーコーやバトラーと同様「ポスト構造主義」や「ポストモダン」周辺の論者に数え入れられることがほとんどである。では、その中で他でもなくドゥルーズ＝ガタリの哲学に焦点が当たるのはなぜなのか。上述の三つの批判点に応答する形で概説していこう。第一に、ドゥルーズ＝ガタリの哲学は、本質主義的でない仕方では物質的・身体的現実（インペアメント）を直接的に記述するための理論モデルを提供する（①に対する応答）<sup>(16)</sup>。ここでいう「本質主義」とは、（人間も含めた）様々な実体に対して帰属させられるべき不変の属性・特性、すなわち「本質」が存在すると想定する立場である。このような立場にいる限り、（たとえどれだけ「言説」の変化可能性を標榜したとしても）障害はひたすら不変で未来のない悲劇的な事象としてしか理解されえない。対してドゥルーズ＝ガタリの哲学は、あらかじめ固定で不変の実体を想定することなく、すべてが生成変化し続ける流動的な存在論を提示している。この意味で Feely は、とりわけドゥルーズの哲学を「反本質主義的な唯物論」の一種と評している

(Feely 2016:869)。このような本質主義批判という観点自体は、ドゥルーズ＝ガタリを受容する以前のCDSにもみられる。しかし、ここで従来のCDSと「存在論的転回」以後のCDSとを分かち点として重要なのは、ドゥルーズ＝ガタリの存在論の枠組みでは、現実の変化可能性が「言説」の水準だけでなく、物質的・身体的水準においても担保されている点である。Feelyによれば、フーコーやパトラーの理論を下敷きとした既存のポスト構造主義的アプローチにおいては、「言説」や「テキスト」へと照準しすぎるあまり、素朴な身体的経験を直接的に語る存在論（「世界には何が存在・実在するのか」と問うこと）に対して過度に懐疑的な態度を取ってしまうがゆえに、物質・身体とその力動的変化が直接的な考慮の対象からは外されてしまう（Ibid.）<sup>(17)</sup>。しかしながら、ドゥルーズ＝ガタリの哲学は、障害者の生きる身体が、まさしくそれ自体の持つ身体的ポテンシャルによって全く新しい状態へと変化する可能性を記述する方途を、その理論体系の内に含んでいる。二人の哲学に則るならば、「(今現在)身体は何であるか」と本質主義的に問うのではなく、「身体は何をなしうるのか」「何になりうるのか」と問うことで、ただ「健常者になる（治療する・健常者の側へと社会的に包摂される）」ことに限らない、未だ当事者自身も思い描いていなかったような身体を選択肢を創造することが要点となる。したがって、ドゥルーズ＝ガタリの存在論は、日々の生活からリハビリテーション、創作活動やスポーツに至るまで、様々な場面において当事者自身が自己の身体と向き合い、そのポテンシャルをいかに引き出すのかを模索することで健常性規範に抵抗するという実践のモデルを提供する。次いでドゥルーズ＝ガタリの哲学は、科学ないし科学技術を単に抑圧的な権力装置とみなして拒絶するだけではなく、むしろ身体に備わるポテンシャルを解放するための積極的手段としても考えることを可能にする（②に対する応答）。実際、ドゥルーズ＝ガタリは共著『千のプラトー』（1980）において、（障害学の論者たちやフーコーが批判してきた）近代国家資本主義の価値観に従属した「メジャーな」科学のあり方とは異なり、物質・身体が本来有している潜在力を解放する「マイナー科学」の系譜を探究している。この探究を通じて、テクノロジーが（単なる「治療」に限らない仕方）で障害者の身体を肯定的に変容しうる点が示唆されている。そして、障害者の身体を理論的に語る道が開けたことで、障害者が抱



える苦痛の経験へとアクセスするための方途も確保される（③に対する応答）。ドゥルーズ＝ガタリを参照する Feely や Dan Goodley などの障害学者たちは、彼らの「情動 affect」という概念に注目している（Goodley, Liddiard and Runswick-Cole 2018）<sup>(18)</sup>。ドゥルーズは『スピノザ 実践の哲学』（1981）という著作で、私たちの「意識」に先行して存在する「情動」の存在とそのメカニズムを、スピノザ哲学の読解を通じて明らかにした。私たちは、自分が意識している範囲よりも遥かに広い範囲の事物（他人、生活環境、テクノロジー、日々なんとなく目にする広告 etc...）から常時影響を被り、心身の状態を無意識下で変容させ続けている。その効果として、私たちが普段「意識」しているような喜怒哀楽や苦痛の経験が表出する（ドゥルーズ＝ガタリを一つの典拠とした「情動理論 Affect Theory」と呼ばれる学際的研究領域では、意識化・言語化された経験としての「感情 emotion」と意識化以前にある「情動」とを区別している）。このような意識以前の複雑なプロセスを捉えるための概念が「情動」であり、本概念を導入することが、障害者の苦痛の経験をより深いレベルから分析し、障害者自身も気づいていなかった原因から苦痛を捉え直し解決へと導くことにつながると、ドゥルーズ＝ガタリを参照する障害学者たちは考えている。なお、このような諸要素による触発をトリガーとした生成変化の存在論を体系化する彼らの哲学の中には、「言説」や「テキスト」の要素も組み込まれている点に注意しておきたい。Feely も指摘するように、ドゥルーズ＝ガタリの哲学体系においては、言説もまた事物の変化を誘発する一要素に数えられており、「言説」と「物質」の両者がフラットに関係し合う存在論が採用されている（Ibid.）。実際、『千のプラトー』などにみられる彼らの哲学では、物質の潜在力を手放しに肯定するだけではなく、人間の身体に対して既存の権力が「言説」を通していかに働きかけ、管理しようとしてきたのかという、フーコーやバトラーとも通底する批判意識が問題となっている。これらの事情から、ドゥルーズ＝ガタリの哲学は、ポスト構造主義的アプローチが有していた強みを継承しつつ（現実に対する構築主義的・批判理論的視座）、障害者の身体的リアリティへのアクセスとその変革可能性をも保持した思考として、障害学者たちに受容されるようになったといえる<sup>(19)</sup>。

以上のようなドゥルーズ＝ガタリの哲学を経由した現代の障害学（CDS）は、もはや「近代」の枠内で障害者の実践を擁護するのではなく、「近代」

というシステムそのものを問いただし、そのシステムが個別の身体の物質的ポテンシャルによって転覆される政治的変革の可能性を積極的に理論化する方向へと舵を切っている。その傾向性が顕在化した一つの例として、Goodleyらが提唱する「ポストヒューマン障害学 Posthuman Disability Studies」を挙げることができる。彼らがそれを掲げる際に依拠している、ロジ・ブライドッティ（彼女自身もドゥルーズ＝ガタリの哲学の影響下で障害についての研究を行っている）の著作『ポストヒューマン』（2013）では、科学技術の進展により、世界のいたるところで「近代」を支えているはずの「人間」という概念が不安定化する事態が（言説・テキストのレベルだけでなく）物質的現実のレベルで起きていることが「ポストヒューマン的状况」として語られている。彼女は本書の冒頭部で以下のように書いている。

メインストリームの文化における論争は、ロボティクス、義肢技術、神経科学、遺伝子工学的資本といった実際上のビジネスにかかわる議論から、トランスヒューマニズムや技術的超越といったより曖昧なニューエイジ的ヴィジョンまで多岐にわたっている。人間の強化が、これらの論争の核にある。それに対してアカデミックな文化において、ポストヒューマンなるものは、批判理論や文化理論の次なるフロンティアとして賞賛されるか、わずらわしい一連の「ポスト」流行りの最新版として敬遠されるかのどちらかである。ポストヒューマンは、かつて万物の尺度であった「人間[Man]」が深刻に脱中心化されている可能性に対して、歓喜のみならず不安をも引き起こしているのである。（Braidotti 2013: 2／ブライドッティ 2019:11）

Goodleyらは論文 *Posthuman disability studies*（2014）でこのようなブライドッティの議論を念頭に置きながら、CDSの問題意識が、まさしくポストヒューマンの問題意識と重なる点を主張する。ポストヒューマン的状况は、「異性愛主義者で白人の健康な男性」を「人間」の理想像とし、そこに入らない者を「非人間的な存在」として排除するという、近代的「人間 Man」の本質規定に基づいた差別の構造を解体する潜在力を伴っている。そして障害とは、まさに「近代社会の良き主体・市民」という理想的な人間像を解体

する契機を与えるものであり、ゆえに極めて「典型的なポストヒューマン的状况 quintessential posthuman condition」(Goodley 2014: 348) の一例であるとされる。例えば、ポストヒューマン論は、自己と他者との明瞭な区別を前提とした個人主義的な「主体」を基礎とする近代的ヒューマニズムに対抗して、人間／非人間にかかわらず異質な諸要素が触発し合う集団主義・関係主義的なモデルを提唱するが、そのようなモデルは、自律性や独立性といった観念に挑戦し、自他が相互依存的な関係においてエンパワーメントし合う扶助の関係性を理論化してきた障害学の思想と共鳴する。あるいは、テクノロジーを利用することによる身体の生成変化を近代的「人間」を解体する契機とみなすポストヒューマン論は、車椅子や補聴器から遺伝子治療に至るまで、様々な科学技術(の産物)に取り巻かれた障害者たちに、それらと創造的な関係を取り結び、自らを縛ってきた健常者中心主義的・能力主義的な体制を打破するための理論的道具立てを与えるとされる<sup>(20)</sup>。そして、彼ら自身が述べているように、ポストヒューマンを問題にすることは「人間」に対する思考を放棄することを全く意味していない。ポストヒューマンは、ヒューマニズム／反ヒューマニズムという二項対立そのものを乗り越えることで、むしろ「人間」について「近代」とは別の仕方でも語ろうとする実践であるという。その中で現代障害学は、近代的「人間」という観念に捕らわれない仕方でも、人間であるところの障害者について語る言葉を探し求めている。

## 5. おわりに：「言葉」と「物」、「理論」と「実践」との間で揺れる障害学

本稿では、CDS の諸特徴を列挙したのち、その具体的な展開／転回を、2000年代におけるクリップ・セオリーの出現から今日におけるドゥルーズ＝ガタリの哲学を経由した唯物論的アプローチの台頭に至るまでの過程を追うことでみてきた。このような障害学の軌跡は一見すると、「社会構築主義から唯物論へ、言説・テキストから物質・身体へ」という単線的なストーリーを描いているようにも見える。しかし、本論で概説してきた諸理論の内容をみれば、障害学の展開が、そのような単純な物語には回収しえない「揺らぎ」を抱えていることがわかる。最後に、この「揺らぎ」への着目をきっかけとして、筆者なりの仕方でも現代障害学の問題意識を総括してみたいと

思う。

筆者の仮説では、障害学はその誕生から今日に至るまで、「言葉」と「物」、「言説」と「身体」・「物質」といった二項対立の間で絶えず揺れ動き続けてきたように思われる。個人的・医学的「身体」の問題としてしか扱われてこなかった障害を社会的・文化的「言説」として扱う視点を切り開いた「社会モデル」と、それに対して「インペアメント」の身体的経験を軽視すべきでない問題提起したジェニー・モリスらの動き、ポスト構造主義を經由して障害への「言説」からのアプローチを洗練させたCDSに対して、当事者の生活世界を見落としてしまうのではないかと疑問を呈する批判者たち、そして、先達の議論の批判意識を受け継ぎながら改めて「物」としての身体へのアクセスを試みる現代の障害学者たち。障害学の展開は、「言葉」と「物」の間を往還するエネルギーによって駆動されてきたといっても過言ではないと思われる。そしてそのことは、障害学の展開／転回を「言葉」から「物」へとという一方向の動きとして理解することの困難さを示している。クリップ・セオリーが単純な社会構築主義ではなく、そこにテクノロジーや自然環境といった「物」への着目を包含していたこと、あるいは、「存在論的転回」以後の論者たちが決して「言説」への注意を手放さなかったことからわかるように、障害学は「言葉」と「物」の間に立ち、それらを双方向的に扱えるモデルを常に探求している。そこではもはや、「言葉」か「物」かという二者択一それ自体が瓦解しているともいえる。

ここで、改めて序論で提起した問題へと帰ってみよう。本稿は立岩によるポストモダンへの言及を皮切りに「理論」と「実践」という二項対立を作業仮説として提示し、その内前者から障害を取り巻く問題状況を捉えようとする試みとして、CDS以後の国外の障害学を位置づけていた。しかし今や、このように両者を截然と区別しどちらかに割り振る態度そのものに対して、翻って異議を申し立てるべきなのではないか。現代の障害学における「言葉」と「物」の間での苦闘は、同時に、「理論」と「実践」との間での苦闘として、すなわち、障害に関するあらゆる状況に適用可能な普遍的「言葉」としての理論構築と、様々な現場における個別具体的な運動実践との間の苦闘としても理解しうるのではないか。そして最終的にその苦闘は、両者の二者択一そのものを疑問に付すのではないか。障害学は、(その「学」としての透明性を絶えず自己批判しながら)その「理論」としての性格を徹底するこ

とで、逆説的にも「実践」を掬い取ろうとし、「理論的实践／実践的理論」とでも呼べるような言語をかりうじて創り出さなければならないという大きな課題に直面している。CDS の狙いが、第一にインペアメント／ディスアビリティ、個人モデル／社会モデル、あるいは本質主義／構築主義という（排他的で二者択一的な）二元論的思考そのものから脱却することにあつたとすれば、これからの障害学は、理論／実践というしばしば対立項とみなされてきた両者を接続する回路を見つけること——二元論的な思考それ自身が「近代」の産物であるとするならば、それは極めて「ポストモダン」的な試みといえる——を、自らの任務としているのではないだろうか。

## 注

- (1) 国内における障害学の基本文献の翻訳状況に関しては、最重要古典の一つとされるマイク・オリバー『無力化の政治 *The Politics of Disablement*』（1990）が2006年に邦訳されたものの、依然として、オリバーやヴィック・フィンケルシュタインらのイギリス障害学「第一世代」の研究、アメリカ障害学の基礎を築いたアーヴィング・ケネス・ズラらの研究から、それらの研究の批判的継承を試みた90年代の動き（ジェニー・モリスら「第二世代」の研究など）までの翻訳と導入が進み切っていない現状がある。なお、本邦における障害学関連の数少ない翻訳書の一つであるコリン・バーンズらによる共著『ディスアビリティ・スタディーズ イギリス障害学概論』では、CDS 以前までの障害学の流れが教科書的に整理されており、本書を読むことで、「古典的な障害学」の問題意識を掴むことができる。
- (2) 石川・長瀬（1999）によって、「社会モデル」を含めた障害学の基本的な枠組みが国内に紹介されて以来、川越・星加・川島（2013）の研究をはじめとして、日本の障害学理論は「社会モデル」概念に対する注釈と再検討を中心に展開されてきたといえる。
- (3) 少数ではあるが、後藤（2007）や野崎（2011）など、国内においても障害研究の側からポスト構造主義やポストモダンの思想を積極的に取り上げ検討した文献は存在している。
- (4) CDS の概要については、Web サイト「オックスフォード哲学事典」の“Critical Disability Theory”の項にまとまった記述がある。  
<https://plato.stanford.edu/entries/disability-critical/>（2020年12月1日最終アクセス）あるいは Goodley（2019）では、CDS の諸成果を網羅的に振り返りつつ、改めてどのような問いが立てられるべきかについていくつかの基本的テーゼが打ち出されており、こちらからも CDS の概要と問題関心を知ることができる。

- (5) Meekosha and Russel (2009) は、この「Critical」という形容詞の意味を、CDSの論者たちの着想源の一つとなっているフランクルト学派の「批判理論 Critical Theory」に結びつけて論究している。実際、テオドル・アドルノとマックス・ホルクハイマーらの仕事を嚆矢とする批判理論が目指していたのは、私たちが生きる近代的現実を支える社会的・経済的基盤の解明とそれに対する批判的介入であり、これは本稿で説明したCDSの狙いと合致するといえる。
- (6) ここで言う「大陸の」哲学とは、主にフランス・ドイツ語圏の哲学を指しているが、CDSが登場する以前から、英語圏の哲学も障害学の発展において幾度も参照されてきた。例えば、ジョン・ロールズ『正義論』(1971)を端緒とするリベラリズムの哲学と、それに対する批判者であるアマルティア・センやマーサ・ヌスバウムらから成る政治哲学の系譜や、ピーター・シンガーの提唱する「パーソン論」などの枠組みをめぐって展開される「生命倫理」、エヴァ・フェダー・キティらが提示する「ケア倫理」などを含む倫理学の系譜などは、国内外の障害学において依然として重要な参照点とされ続けている。
- (7) フーコーの研究は障害学に留まらず、その周辺分野にも甚大な影響を及ぼしている。例えばフーコーの「生政治」概念を、時代の制約ゆえに彼が論じえなかった現代の遺伝子治療などの問題系へと拡張・深化させたニコラス・ローズの研究(Rose 2007)や、福祉学の領域で、フーコーが『監視と処罰』でソーシャルワークをまさしく「近代」的抑圧・支配の一形態として批判している点を踏まえつつ、社会的な支援が不可避的に権力を再生産してしまう構造を告発するレスリー・マーゴリンによる批判的研究(Margolin 1997)など、枚挙にいとまがない(社会福祉研究におけるフーコー受容とそれ以後の研究動向については佐々木(2014)を参照)。また、国内では、障害学の研究者としても知られる市野川容孝によるフーコー論(市野川 2000)が、フーコーと障害というテーマを扱っている。
- (8) ただし、このバトラーの枠組みをそっくりそのまま障害の議論へと転用することに対しては、Samuels (2002)による批判的な見解なども存在している。なお、障害学におけるバトラー受容を詳細に論じたものとしては、井芹(2019)を参照のこと。
- (9) このような研究動向は、国内における村上(2013)や西村(2018)らによる現象学的質的研究や、石原(2013)らによる「当事者研究」と呼ばれる流れとも呼応するものであるといえる。また、稲原・川崎・中澤・宮原(2020)は、障害者の「生きられた経験」を精緻に記述する方法論としてのフェミニスト現象学について概説している。
- (10) そもそもCDS以前に、障害学の歩みにおいて他分野との交差が重要な契機をなしてきた点は、ジェニー・モリスらによる研究(Morris 1996)などからも明らかである。モリスは本書において、フェミニズムと障害運動の双方において「見知らぬ者 stranger」に留まっていた女性障害者の主張を取り上げ、フェミニズムと障害学との出会いを準備したことで知られている。加えてモリスは、それまでディスアビリティに偏りがちであった社会モデル以来の障害研究に対して、改めてインペアメントの経験の重要性を主張した点でも、障害学のその後の発展に大きな影響を与えている。

- (11) 国内におけるクリップ・セオリーの受容は、井芹真紀子の研究を中心として主にクィア理論研究者の側から進められてきた一方で、意外にも障害学者の側からはあまり紹介がなされてこなかったように感じられる。このような状況に際して、本理論を障害学の側からも紹介していくことは、本邦における障害学とクィア理論との対話を開いていく意味でも不可欠であると筆者は考えている。
- (12) 「強制的な健全性」の内実については、McRuer 自身による簡潔な解説があるので、そちらも参照のこと (McRuer 2006a)。国内の文献では井芹 (2013) が、本概念についてクィア理論との関係から掘り下げた分析を行っている。また榊原 (2016) も、わずかだが McRuer のこの論点に触れている。
- (13) Kafer『フェミニスト・クィア・クリップ』については、本ジャーナル第三号に筆者による書評論文が掲載されているので、そちらも参照いただければ幸いである。
- (14) 紙幅の都合上詳述することはできなかったが、Kafer の時間論がエーデルマンに対する批判的論究を背景として存立している点は見逃せない。Kafer のエーデルマン批判も含めた、クリップ・セオリーにおけるエーデルマン受容と批判的応答については、井芹 (2020) で丁寧に検討が行われている。
- (15) このような批判を行うトム・シェイクスピアなどは、障害者の生活世界を記述するための方法論として、ロイ・バスカーらが牽引する「批判的实在論 Critical Realism」の採用を提案している (Shakespeare 2006)。なお、Feely は、批判的实在論が物質世界へのアクセスの方法論として有効であることを認めつつも、その方法論が結局のところ本質主義への回帰を果たしてしまっているという再批判を行っている (Feely 2016:868)。
- (16) このようなドゥルーズ＝ガタリの存在論は、昨今まさしく物質 (性) を非本質主義的な仕方では捉えようとする動きとして現れてきた「新しい唯物論 New Materialism」という学際的動向の一つの源流となっている。ところで、「新しい唯物論」がフェミニズムの文脈から出現してきたという来歴は、障害学の側からみても無視できないものである。本潮流の歴史的経緯や展開については、北野 (2018) において詳しく語られている。
- (17) しかしながら、フーコーやバトラーのテキストに「物質」や「身体」への着目がなかったと断じるのは性急である (Feely 自身もそのような留保を付け加えている)。例えば、フーコーが晩年の『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』(1984) で展開しようとしたのは、西洋近代の思考とは別の仕方での自己の実存・身体について語る技術の模索であったことが知られている。バトラーも、まさに *Bodies That Matter* (1993) という名の著書において、言説には単純に還元されない身体や物質性の水準に焦点を当てており、二人を単に社会構築主義者としてのみ取り扱うのは、二人のテキストが持つはずの可能性が軽視されてしまうことにつながるかねない。
- (18) ドゥルーズ＝ガタリの哲学を「情動」の文脈から援用する動きは、彼らの主著『千のプラトール』の英訳者であるブライアン・マッスミが、まさしく「情動理論」の一翼を担う論者である点にも起因していると思われる。
- (19) 国内においては檜垣 (2012) が、まさしくドゥルーズ＝ガタリの哲学を「社会構築主義に偏りすぎることなく反本質主義的な仕方では身体や生命を語る理論」

として応用しうる展望を（フォーコーやバトラーの検討も含めて）包括的に示している。また、国内のドゥルーズ研究で障害の問題系に触れた文献としては、小泉（2015）などがすでに存在する。

- (20) このような、テクノロジーによって「近代」（あるいは資本主義）を乗り越えるという政治的解放の言説は、昨今、現代思想の文脈で話題となっている「加速主義 Accelerationism」や、その延長線上で現れた「ゼノフェミニズム Xenofeminism」と呼ばれる、科学技術による身体の「疎外」を戦略的に引き受け転覆の手段とする新たなフェミニズムの流れなどとも類似性があると思われる（Hester 2018）。しかし他方で、上田・渡部（2008）などでも議論されているように、テクノロジーによるエンハンスメントが多分に倫理的・政治的論争の余地を含んでいることは考慮に入れた方がよいと思われる。例えば、エンハンスメントの無批判な称揚は、それにアクセスできる人とそうでない人との間の経済的格差をますます拡大させると同時に、両者間の「能力主義」的な序列関係を再生産してしまう危うさを伴う点などが、障害との関連からも争点となるだろう。

## 参考文献

- 石川 准・長瀬 修編 1999『障害学への招待』明石書店。
- 石原 孝二編 2013『当事者研究の研究』医学書院。
- 井芹 真紀子 2013「フレキシブルな身体 キア・ネガティヴィティと強制的な健常的身体性」『論叢キア』6:37-57。
- 2019「<不在>からの視座、<不在>への視座 ディスアビリティ・フェミニズム・キア」『現代思想』47(3):289-298。
- 2020「反／未来主義を問い直す キアな対立性と動員される身体」『思想』1150:70-86。
- 市野川 容孝 2000『身体／生命』岩波書店。
- 稲原 美苗・川崎 唯史・中澤 瞳・宮原 優編 2020『フェミニスト現象学入門 経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版。
- 上田 昌文・渡部 麻衣子編 2008『エンハンスメント論争 身体・精神の増強と先端科学技術』社会評論社。
- 川越 敏司・星加 良司・川島 聡 2013『障害学のリハビリテーション 障害の社会モデルその射程と限界』生活書院。
- 北野 圭介 2018『マテリアル・セオリーズ 新たななる唯物論に向けて』人文書院。
- 小泉 義之 2015『ドゥルーズの哲学 生命・自然・未来のために』講談社学術文庫。
- 後藤 吉彦 2007『身体の社会学のブレイクスルー 差異の政治から普遍性の政治へ』生活書院。
- 榊原 賢二郎 2016『社会的包摂と身体 障害者差別禁止法制後の障害定義と異別処遇を巡って』生活書院。



- 佐々木 宏 2014 「ポストモダニズムと社会福祉 「近代的なるもの=社会福祉」 批判への応答」『教育社会学研究』94(0):113-136。
- 立岩 真也 2018 『不如意の身体 病障害とある社会』 青土社。
- 土佐 弘之 2020 『ポスト・ヒューマニズムの政治』 人文書院。
- 西村 ユミ 2018 『語りかける身体 看護ケアの現象学』 講談社。
- 野崎 泰伸 2011 『生を肯定する倫理へ 障害学の視点から』 白澤社。
- 檜垣 立哉 2012 『ヴィータ・テクニカ 生命と技術の哲学』 青土社。
- 村上 靖彦 2013 『摘便とお花見 看護の語りの現象学』 医学書院。
- エーデルマン、リー 2019 「未来は子ども騙し クィア理論、非同一化、そして死の欲動」 藤高和輝訳、『思想』1141:107-126。
- バーンズ、コリン・シェイクスピア、トム・マーサー、ジェフ 2004 『ディスアビリティ・スタディーズ イギリス障害学概論』 杉野昭博・松波めぐみ・山下幸子訳、明石書店。
- Bayliss, Phil. 2009. Against Interpretosis: Deleuze, Disability, and Difference. *Journal of Literary & Cultural Disability Studies* 3(3):281-294.
- Bell, Christopher. 2006. Introducing White Disability Studies A Modest Proposal. In Lennard J. Davis(ed.). *The Disability Studies Reader. 2nd ed*, pp.275-282. NY: Routledge.
- Braidotti, Rosi. 2013. *The Posthuman*. Polity. (ブライドットティ、ロージ 2019 『ポストヒューマン 新しい人文学に向けて』 門林 岳史監訳、フィルムアート社。)
- Corker, Mairian and Shakespeare, Tom (eds.). 2002. *Disability/Postmodernity Embodying Disability Theory*. Continuum.
- Davis, Lennard J. 1995. *Enforcing Normalcy: Disability, Deafness, and the Body*. Verso.
- Feely, Michael. 2016. Disability studies after the ontological turn: a return to the material world and material bodies without a return to essentialism. *Disability and Society* 31(7):863-883.
- . 2019. Assemblage analysis: an experimental new-materialist method for analysing narrative data. *Qualitative Research* 20(2):1-20.
- Garland Thomson, Rosemarie. 1997. *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature*. Columbia University Press.
- Goodley, Dan. 2012. Jaques Lacan + Paul Hunt = Psychoanalytic Disability Studies. In Dan Goodley, Bill Hughes, and Lennard Davis (eds.). *Disability and Social Theory: New Developments and Directions*, pp.179-194. London: Palgrave Macmillan UK.
- Goodley, Dan and Rebecca Lawthom and Katherine Runswick-Cole. 2014. Posthuman disability studies. *Subjectivity* 7(4):342-361.
- . 2019. Provocations for Critical Disability Studies. *Disability and Society* 34(6):972-997.
- Goodley, Dan, Kirsty Liddiard and Katherine Runswick-Cole. 2018. Feeling Disability:

- Theories of Affect and Critical Disability Studies. *Disability & Society*. 33(2):197-217.
- Hester, Helen. 2018. *Xenofeminism*. Polity.
- Hickey-Moody, Anna and Denise Wood. 2008. Imagining Otherwise: Disability, Deleuze and Second Life. *ANZCA08 Power and Place: Refereed Proceedings*, pp:1-16.
- Kafer, Alison. 2013. *Feminist, Queer, Crip*, Indiana University Press.
- Margolin, Leslie. 1997. *Under the Cover of Kindness: The Invention of Social Work*. University of Virginia Press. (マーゴリン、レスリー2003『ソーシャルワークの社会的構築 優しさの名のもとに』中河 伸俊・上野 加代子・足立 佳美訳、明石書店。)
- McRuer, Robert. 2006a. Compulsory Able-Bodiedness and Queer/Disabled Existence. In L. Davis (ed.). *Disability Studies Reader*, pp. 301–308. London: Routledge.
- . 2006b. *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability*. NYU Press.
- . 2018. *Crip Times: Disability, Globalization, and Resistance*. NYU Press.
- Meekosha, Helen and Shuttleworth, Russell Peter. 2009. What's So Critical About Critical Disability Studies? *Australian Journal of Human Rights* 15(1):pp.47-75.
- Mercieca, Daniela and Duncan Mercieca. 2010. Opening Research to Intensities: Rethinking Disability Research with Deleuze and Guattari. *Journal of Philosophy of Education* 44(1):79–92.
- Mitchell, David T. and Sharon L. Snyder. 2000. *Narrative Prosthesis Disability and the Dependencies of Discourse*. The University of Michigan Press.
- Morris, Jenny (ed.). 1996. *Encounters with Strangers: Feminism and Disability*. The Women's Press.
- Oliver, Mike. 1990. *The Politics of Disablement*. New York: St. Martin's Press.
- Reeve, Donna. 2012. Cyborgs, Cripples, iCrip: Reflections on the Contribution of Haraway to Disability Studies. In Dan Goodley, Bill Hughes, and Lennard Davis (eds.). *Disability and Social Theory: New Developments and Directions*, pp:91-111. London: Palgrave Macmillan UK.
- Ray, Sarah Jaquette and Jay Sibara (eds.). *Disability Studies and the Environmental Humanities: Toward an Eco-Crip Theory*. University of Nebraska Press.
- Roets, Griet and Rosi Braidotti. 2012. Nomadology and Subjectivity: Deleuze, Guattari and Critical Disability Studies. In Dan Goodley, Bill Hughes, and Lennard Davis (eds.). *Disability and Social Theory: New Developments and Directions*, pp:161-178. London: Palgrave Macmillan UK.
- Rose, Nikolas. 2007. *The Politics of Life Itself: Biomedicine, Power, and Subjectivity in the Twenty-first Century*. Princeton University Press. (ローズ、ニコラス 2019『生そのものの政治学 二十一世紀の生物医学、権力、主体性』檜垣 立哉・小倉 拓也・佐古 仁志・山崎 吾郎訳、法政大学出版局。)
- Samuels, Ellen. 2002. Critical Divides: Judith Butler's Body Theory and the Question of Disability. *NWSA Journal* 14(3):58-76.

- Sandahl, Carrie. 2003. Queering the Crip or Crippling the Queer?: Intersections of Queer and Crip Identities in Solo Autobiographical Performance. *GLQ* 9(1-2): 25-56.
- Shakespeare, Tom. 2006. *Disability Right and Wrongs*. London: Routledge.
- Shildrick, Margrit. 2012. Critical disability studies: rethinking the conventions for the age of postmodernity. In Nick Watson, Alan Roulstone, and Carol Thomas (eds.). *Routledge Handbook of Disability Studies*, pp.30-41. London: Routledge.
- Titchkosky, Tanya and Rod Michalko. 2012. The Body as the Problem of Individuality A Phenomenological Disability Studies Approach. In Dan Goodley, Bill Hughes, and Lennard Davis (eds.). *Disability and Social Theory: New Developments and Directions*, pp.127-142. London: Palgrave Macmillan UK.
- Tremain, Shelley (ed.). 2005. *Foucault And the Government of Disability*. University of Michigan Press.
- Wilton, Robert David. 2003. Locating physical disability in Freudian and Lacanian psychoanalysis: Problems and prospects. *Social & Cultural Geography* 4(3):369-389.